

「逆行する神」

士師記

コリント人への第一の手紙

第7章 1節～8節

第1章 26節～29節

説教 本庄 侑子 伝道師

今朝は、ヨシュア記に続く士師記をお読みしています。ヨシュアの死後、イスラエルは約束の地で、あっという間に神ならぬものの影響を受けてとりこになりました。強い先住民や近隣諸国への恐れによって、目に見えない神に頼るよりは、目に見える力を手に入れる方が確実に思えたのです。それぞれの部族がそれぞれの土地の先住民にならい、バラバラになっていきました。より強力な力を手に入れるために結束することはあっても、共に生きるために仕え合うことはありませんでした

神がイスラエルをエジプトでの奴隷生活から解放し、約束の地に導き入れてくださったのは、神の民イスラエルを通して世界を祝福するためでした。神はイスラエルを手放されず、敵を起こしてイスラエルを弱く、貧しくさせました。イスラエルは、助けを求めて、再び神に向かって祈るようになりしました。神は、彼らの祈りにおこたえになり、士師と呼ばれるリーダーを起こされます。今朝は士師の中でも特に有名なギデオンの話をお読みしています。ギデオンは、世界中で無料贈呈されている《ギデオン聖書》という名前の由来となった人物です。

ある日、ギデオンはミデアン人の攻撃を恐れて酒ぶねの中に隠れて麦を打っていました。そこに主の使いが現れます。「大勇士よ、主はあなたと共におられます。」「あなたの力をもって行って、ミデアン人の手からイスラエルを救い出さない。わたしがあなたをつかわすのではありませんか。」（士師記 第6章12節、13節）

ギデオンは答えます。「ああ主よ。わたしはどうしてイスラエルを救うことができましょうか。わたしの氏族はマナセのうちで最も弱いものです。わたしはまたわたしの父の家族のうちで最も小さいものです。」（6章15節）ギデオンは、イスラエルの中で最も弱い部族に属し、その中でも最も若く、自信もありませんでした。しかし、主が共にいてくださるという約束の言葉を信じて立ち上がりました。

立ち上がったギデオンは兵士をかき集めました。相手は12万人もの軍隊を率いていました。できるだけ多くの兵士が必要です。しかし、主は言われたのです。「あなたと共にいる民はあまりに多い。」（7章2節）そして、ギデオンがかき集めた3万2千人のうち、2万人をお帰しにした別の場所に移って語り続けたら良いのです。

りました。主はさらに言われました。「民はまだ多い。」（4節）そして、たった300人にまで兵士が減らされてしまいました。神の約束を信じて踏み出した信仰の一步と計画が、神ご自身の手によって台無しにされてしまいました。

神は、ギデオン率いる300人に勝利をお与えになりました。「三百人のものがラッパを吹くと、主は敵軍をしてみな互に同士討ちさせられた。」（7章22節）ギデオンは、最も弱く小さい者として、神を信じる者とされていきました。

私たちが同じ神によって、繰り返し弱く、小さくされます。信仰の一步を踏み出したその先で、人間の力を寄せ集めることに必死になる私たちがいます。恐れを覆い隠すようにして目に見える力を求め、強さを身につけようとしています。しかし、神の憐れみは最も弱く、最も小さな所に向けられています。聖書が語る《弱さ》、神の目に映る《小ささ》、それは、数の少なさや年の若さ、社会的地位の低さ以上に、愛を求めて叫んでいる《弱さ》、助けなくしては生きられない《小ささ》、私たち一人一人が心の奥底に隠し持っている《罪》にあります。そしてそこにこそ、神の憐れみは向かうのです。

教会の原点もそうでした。教会は、戦いに勝ち抜いた強い者たちが始めたものではありません。抜け殻のようになった敗北者たちのもとに、復活の主が現れてお語り下さった所から始まったのです。《ギデオン聖書》の歴史もそうでした。発会式の参加者はたった3名でした。しかし、神の力が働いて、今や190以上の国々で聖書が読まれるようになりました。思えば、私が初めて手にした聖書はギデオン聖書でした。神がギデオン聖書を通して、誰も立ち入れず、自分自身でも怖くて立ち入れなかった最も小さな私を訪れ、教会の礼拝へと招き、救い出してくださいました。

かつてギデオンを勇士とし、教会を立て、ギデオン協会を発会させ、あの日私を救った神の憐れみが、今もここに臨んでいます。主の日に礼拝が開かれ、罪を滅ぼしてくださった神の憐れみが全世界に証されています。私たちは今日も、神の憐れみに支えられた「最も小さい者」として、ここから遣わされていくのです。

（記 本庄侑子）